

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和5年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第7号（10月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒 899-3401

南さつま市金峰町大野 2200

TEL 099-245-1081 (代表)

099-245-1157 (直通)

099-245-1149 (FAX)

テレホンサービス

鹿児島 099-296-6430

296-6431

ホームページアドレス : <http://www.jpnp.ne.jp/kagoshima>

メールアドレス : nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp



農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理, 安全使用
2. 作物に対する安全 適期, 適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止
(周辺住民等への危被害防止)
(河川, 湖沼, 海などへの汚染防止)
(養蚕, 養蜂などへの危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

農薬ラベルを確認しましょう

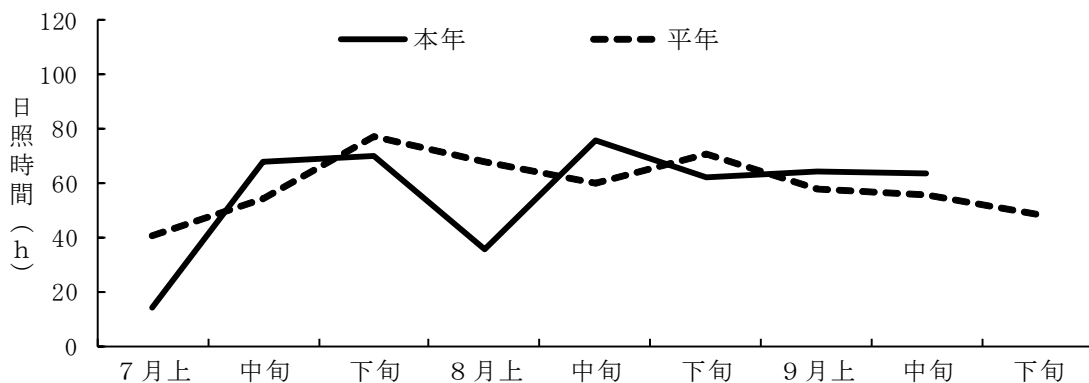
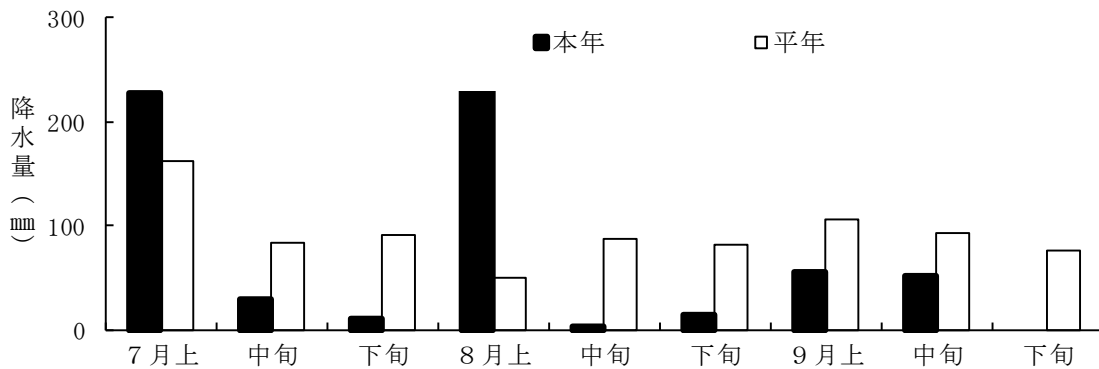
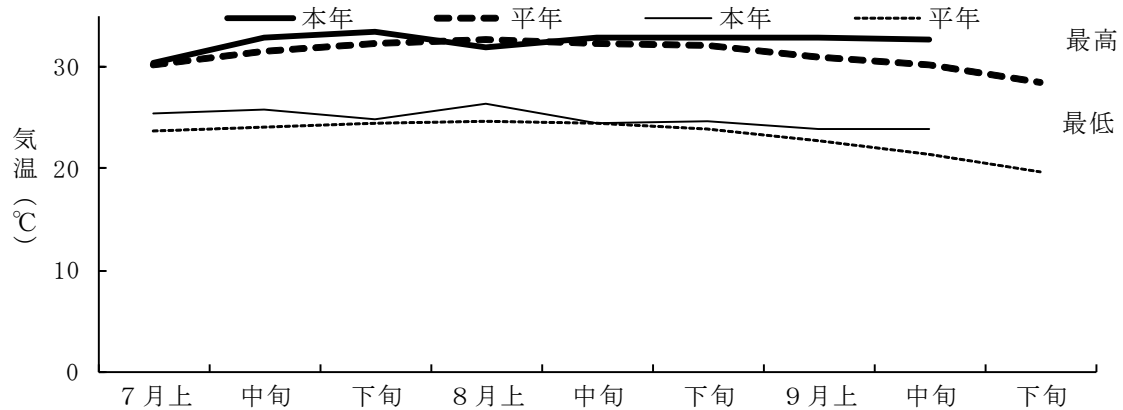
農薬の飛散(ドリフト)にも注意しましょう

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（9月23日から10月22日） 令和5年9月21日 鹿児島地方气象台 発表

要素	地域	確率（%）			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	10	20	70	九州南部および奄美地方では、気温は平年より高く、降水量と日照時間はほぼ平年並みの見込み。
	奄美地方	10	20	70	
降水量	九州南部	40	30	30	
	奄美地方	30	40	30	
日照時間	九州南部	30	30	40	
	奄美地方	30	40	30	

II. 7～9月の気象情報（鹿児島地方气象台 観測点：加世田）



【病害虫発生予報の概要】

作物		病害虫名	発生量	
			現況	予報
花 き	キク	ハダニ類（県本土，施設）	やや少	並
		アザミウマ類（県本土，施設）	並	やや多
作物・ 野菜・ 花き 共通	ダイズ，イチゴ， ダイコン，キャベツ， 根深ネギ，キク等	ハスモンヨトウ	やや少	並
果 樹	カンキツ	かいよう病（県本土・熊毛地域）	並	並
		〃（奄美地域）	並	並
		黒点病（県本土・熊毛地域）	並	並
		〃（奄美地域）	やや多	やや多
		ミカンハダニ（県本土・熊毛地域）	やや多	多
		〃（奄美地域）	並	並
		サビダニ類（県本土・熊毛地域）	少	やや少
		〃（奄美地域）	やや少	並
		果樹カメムシ類	やや多	多
		果実吸蛾類（県本土・熊毛地域）	並	並
〃（奄美地域）	並	並		
茶 樹	チャ	カンザワハダニ	やや多	多

【病害虫発生予報】

I. 普通作物

防除に関する今月の留意事項

1. サツマイモ

(1) サツマイモ基腐病

発生が見られたほ場では、次年度の発病リスクを軽減するために、収穫後に以下の防除対策を徹底する。

<本ほ> (収穫後の残さ対策)

ア 屑イモや諸梗は次期作の伝染源となるのでほ場外に持ち出し、適切に処分する。

イ 僅かに残った残さの分解を促進するため、収穫直後に速やかに残さの細断やすき込みを行う。

また、土壌が乾燥している場合は、灌水を行ってから耕耘する。

サツマイモ基腐病の生態と防除に関する詳しい情報は、鹿児島県 (https://www.pref.kagoshima.jp/ag06/documents/documents/74570_20221018104909-1.pdf), 農研機構 (https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/files/stem_blight_and_storage_tuber_rot_of_sweetpotator04.pdf) をご覧ください。



鹿児島県
サツマイモ基腐病防除
対策マニュアル(第3版)
令和4年10月改訂



農研機構
サツマイモ基腐病の
発生生態と防除対策
(令和4年度版)

Ⅱ. 野 菜

防除に関する今月の留意事項

1. 施設野菜

気温が高く推移しており、今後も高い予報となっているため害虫の発生が多くなることが予想される。特に下記の害虫はウイルス病を媒介するため、育苗期から定植初期の総合的な対策が重要である。

なお、キュウリの退緑黄化病及び黄化えそ病については、令和5年度技術情報第12号（9月15日付け）を参照。



技術情報第12号

(1) 対象害虫

ア タバココナジラミ

本虫はサヤインゲンに白化莢，トマトに着色異常果を発生させるだけでなく，トマト黄化葉巻病やキュウリ/メロン退緑黄化病の病原ウイルス（TYLCV，CCYV）を媒介する。

イ アザミウマ類

本虫は直接的な被害をもたらすだけでなく，ミナミキイロアザミウマはキュウリ黄化えそ病の病原ウイルス（MYSV），ミカンキイロアザミウマやミナミキイロアザミウマなどはトマト黄化えそ病の病原ウイルス（TSWV）を媒介する。

(2) 防除上注意すべき事項

ア ハウス内及びその周辺の雑草は，媒介虫の生息・増殖場所になるので定植10日前までに除草する。

イ 成虫の侵入を抑制するために紫外線カットフィルム等を利用する。ただし，ミツバチなどの訪花昆虫を使用する場合は，活動が妨げられるので利用しない。

ウ ハウス内への侵入を防ぐため，開口部（サイド等）には必ず防虫ネットを設置する。なお，気温の高い時期はハウスに寒冷紗を張る等，昇温抑制対策を可能な限り行う。

エ 防虫ネットの設置のみでは侵入を完全に防ぐことができないので，定植時には必ず粒剤を施用する。

オ タバココナジラミは黄色粘着トラップを，アザミウマ類は青色粘着トラップを設置し，早期発見・初期防除に努める。

カ 同一系統薬剤の連用を避け，作用性の異なる薬剤（RACコード参照）のローテーション散布に努める。

2. 露地野菜

(1) アブラナ科のチョウ目害虫

コナガやハスモンヨトウ等のチョウ目害虫は、生育初期および結球前に防除を徹底する。定植前に灌注処理剤や粒剤等で処理行った場合も、その後の発生に注意し、発生初期に防除を行う。

ア 発生状況は各地域で異なるため、ほ場を見回り、新たな被害を認めたら直ちに防除を行う。

イ 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤（RACコード参照）のローテーション散布に努める。

(2) アブラナ科の黒腐病・軟腐病

本病は土壌伝染性の病害で、風雨によって感染が誘発される。特に台風襲来前後は感染拡大が懸念されるため、必ず以下の防除対策を行う。

ア 発病してからの防除は困難なので、予防散布の徹底に努める。

イ 寒冷紗のべたがけ等、暴風雨の対策をできる限り行う。

ウ 発病株は、見つけ次第速やかに除去する。

Ⅲ. 花き

1. キク

(1) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土(施設)

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率30% (平年36%)

: やや低い (-)

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

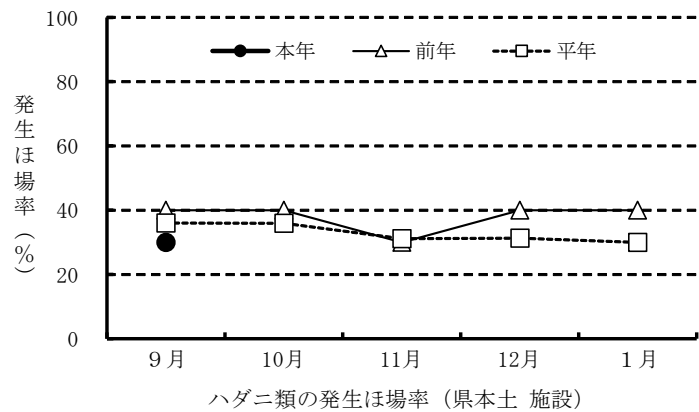
(ア) 出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生する機会が多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と早期防除に努める。

(イ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。

(ウ) 薬剤は葉裏までよくかかるように散布する。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤 (RACコード参照) のローテーション散布を行う。

(オ) 収穫後の残さは早めに除去し、適正に処分する。



(2) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土(施設)

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率30% (平年31%) : 並

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) アザミウマ類はキクえそ病 (T S W V), キク茎えそ病 (C S N V) を媒介するので、ほ場への侵入防止と早期発見および早期防除に努める。

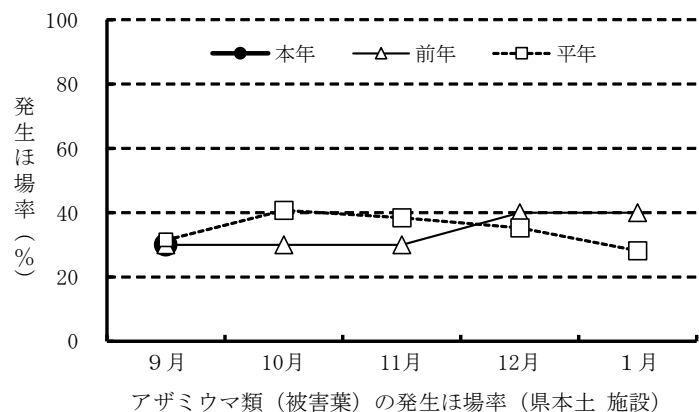
(イ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。

(ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤 (RACコード参照) のローテーション散布を行う。

(エ) クロゲハナアザミウマは中下位葉にも寄生しているため、薬剤は下葉の葉裏までかかるよう丁寧に散布する。

(オ) 発生動向を把握するためには、出入口や開口部付近での青色粘着シートの設置が有効である。

(カ) 収穫後の残さは早めに除去し、適正に処分する。



IV. 作物・野菜・花き共通

1. ダイズ、イチゴ、ダイコン、キャベツ、根深ネギ、キク等

(1) ハスモンヨトウ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

フェロモントラップ誘殺数：やや少

表 各品目での発生状況

作物名	発生ほ場率 (%)		概 評
	本年	平年	
サツマイモ	2	5	やや少
ダイズ	58	60	並
ダイコン	8	-	-
キャベツ	25	22	並
キク	0	3	やや少

注) ダイコンは令和5年度から調査を開始したため平年値なし

注) キクは被害発生ほ場率

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

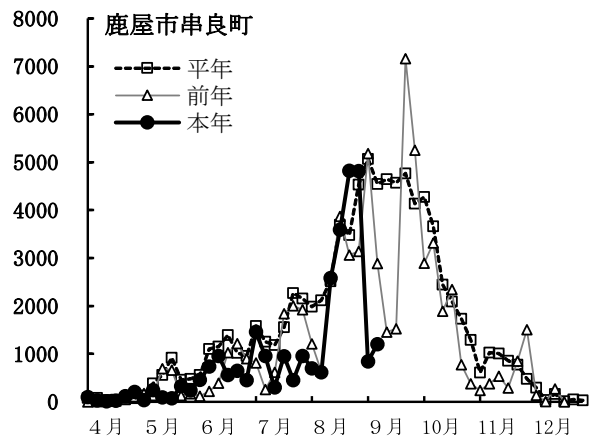
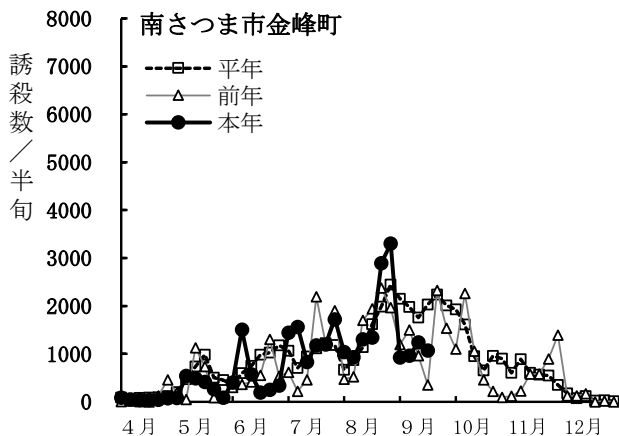
(ア) 発生状況は、作物や各地域で異なるため、ほ場を見回り、幼虫の発生状況を確認する。

(イ) 若齢幼虫は集団で表皮だけを残して食害（白変葉）するので、発生の目安にする。

(ウ) 卵塊や若齢幼虫が寄生している葉は、見つけ次第摘み取り処分する。

(エ) 中・老齢幼虫になると薬剤が効きにくいので、防除は若齢幼虫の多い時期に行う。

(オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤（RACコード参照）のローテーション散布に努める。



フェロモントラップによるハスモンヨトウの誘殺状況

V. 果 樹

1. カンキツ

(1) かいよう病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域(果実) 並

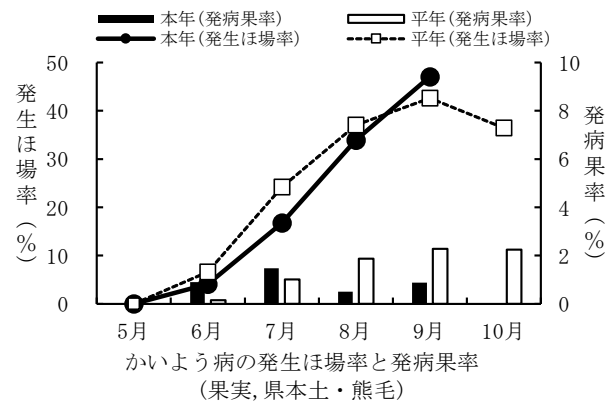
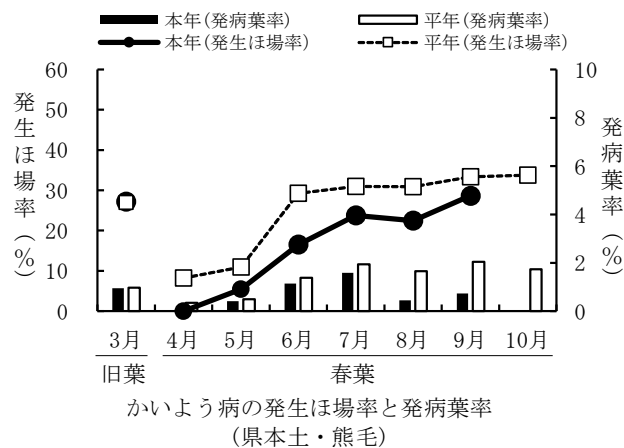
奄美地域(果実) 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	並	並
発生ほ場率	29% (平年 33%) : 並	47% (平年 43%) : 並
発病率	0.7% (平年2.0%) : やや低い (-)	0.9% (平年2.3%) : やや低い (-)



<奄美地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	やや少	並
発生ほ場率	0% (平年 19%) : やや低い (-)	14% (平年 14%) : 並
発病率	0% (平年0.3%) : やや低い (-)	0.4% (平年0.2%) : やや高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 台風の接近が予想される場合は、3日前～前日の予防散布を行う。また、菌は降雨時に飛散・伝搬され、多雨年に発生が多いので、降雨にも注意する。

(イ) 罹病した夏秋梢やミカンハモグリガの食害を受けた夏秋梢はせん除し、伝染力の強い越冬病斑を少なくする。

(2) 黒点病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 並

奄美地域 やや多

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 52% (平年 51%)：並

発病果率 3.1% (平年 10.8%)：やや低い (-)

<奄美地域>

(ア) 調査結果 発生量：やや多

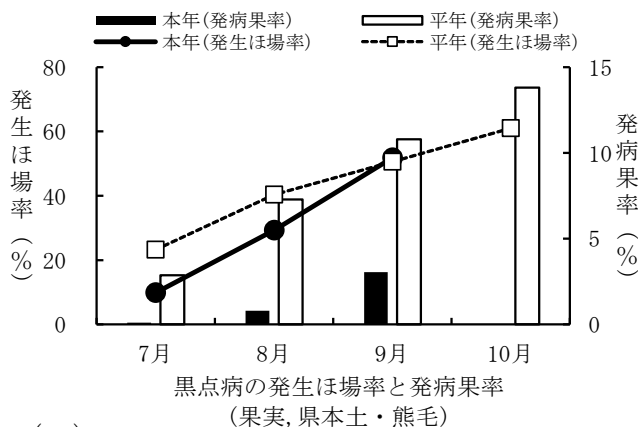
発生ほ場率 14% (平年 6%)：やや高い (+)

発病果率 0.9% (平年 0.2%)：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 多雨が予想される場合には予防散布を行う。

(イ) 伝染源となる枯れ枝はこまめにせん除し、せん定くずは園外に持ち出して処分する。



(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 多

奄美地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率 34% (平年 23%)

：やや高い (+)

寄生葉率 4.1% (平年 2.6%)

：やや高い (+)

発生程度の高いほ場を認めた (+)

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

<奄美地域>

(ア) 調査結果 発生量：並

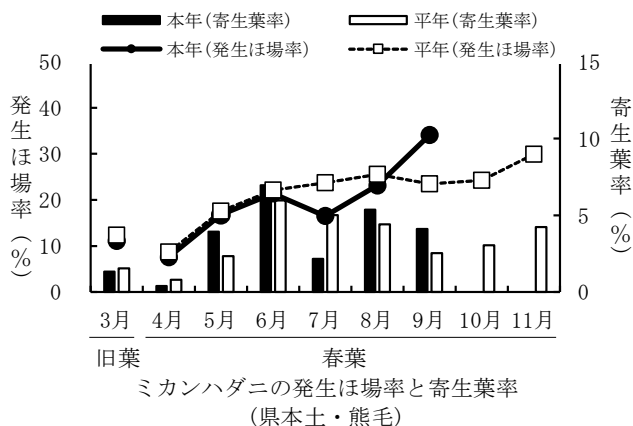
発生ほ場率 14% (平年 11%)：並

寄生葉率 0.9% (平年 0.2%)：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 1葉当たり雌成虫数0.5~1.0頭(寄生葉率で30~40%)を目安に防除する。

(イ) 同一系統薬剤の使用は年1回とし、葉裏までかかるように丁寧に散布する。



(4) サビダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 やや少

奄美地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：少

発生ほ場率 0% (平年 7%)

: 低い (-)

被害果率 0% (平年0.3%)

: 低い (-)

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

<奄美地域>

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 0% (平年 4%) : やや低い (-)

被害果率 0% (平年0.2%) : 並

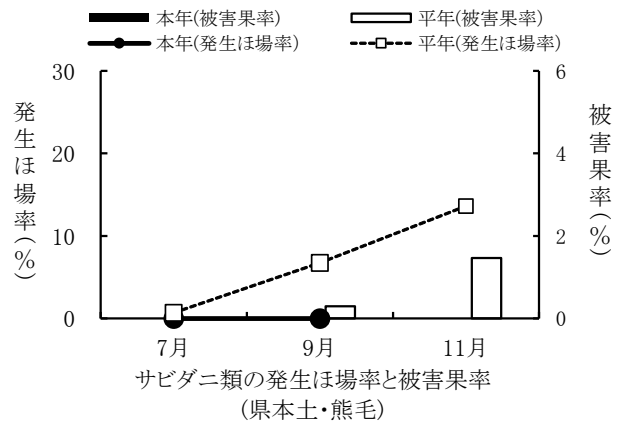
(イ) 気象予報

気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) リュウキュウミカンサビダニは秋季以降も果実上で加害し続けるので、被害果を認めた場合は直ちに防除する。

(イ) 前年度の発生ほ場では、被害果が出ることが多いので、防除に努める。



(5) 果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ, ツヤアオカメムシ)

(令和5年度技術情報第10号 (8月18日付け) 参照)

(令和5年度発生予察注意報第2号 (8月25日付け) 参照)

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率 7% (平年 5%) : やや高い (+)

ヒノキ果の口針鞘数 (吸汁痕数) 22.6本/果 (平年15.7本/果)



表 ヒノキ球果での口針鞘数 (吸汁痕数) の推移 (単位：本/果)

調査年	7月		8月		9月	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期
本年	0.7	3.1	8.2	13.9	22.6	
平年	0.4	2.8	6.9	10.8	15.7	

注1) 9月前期の口針鞘数(本/果)は、南さつま市:18.2, いちき串木野市:43.4, 阿久根市:15.8, 出水市①:27.1, 出水市②:28.5, さつま町:25.2, 霧島市:14.4, 曾於市:8.0。

2) カメムシがヒノキ球果から離脱する目安は、口針鞘数25本/果。

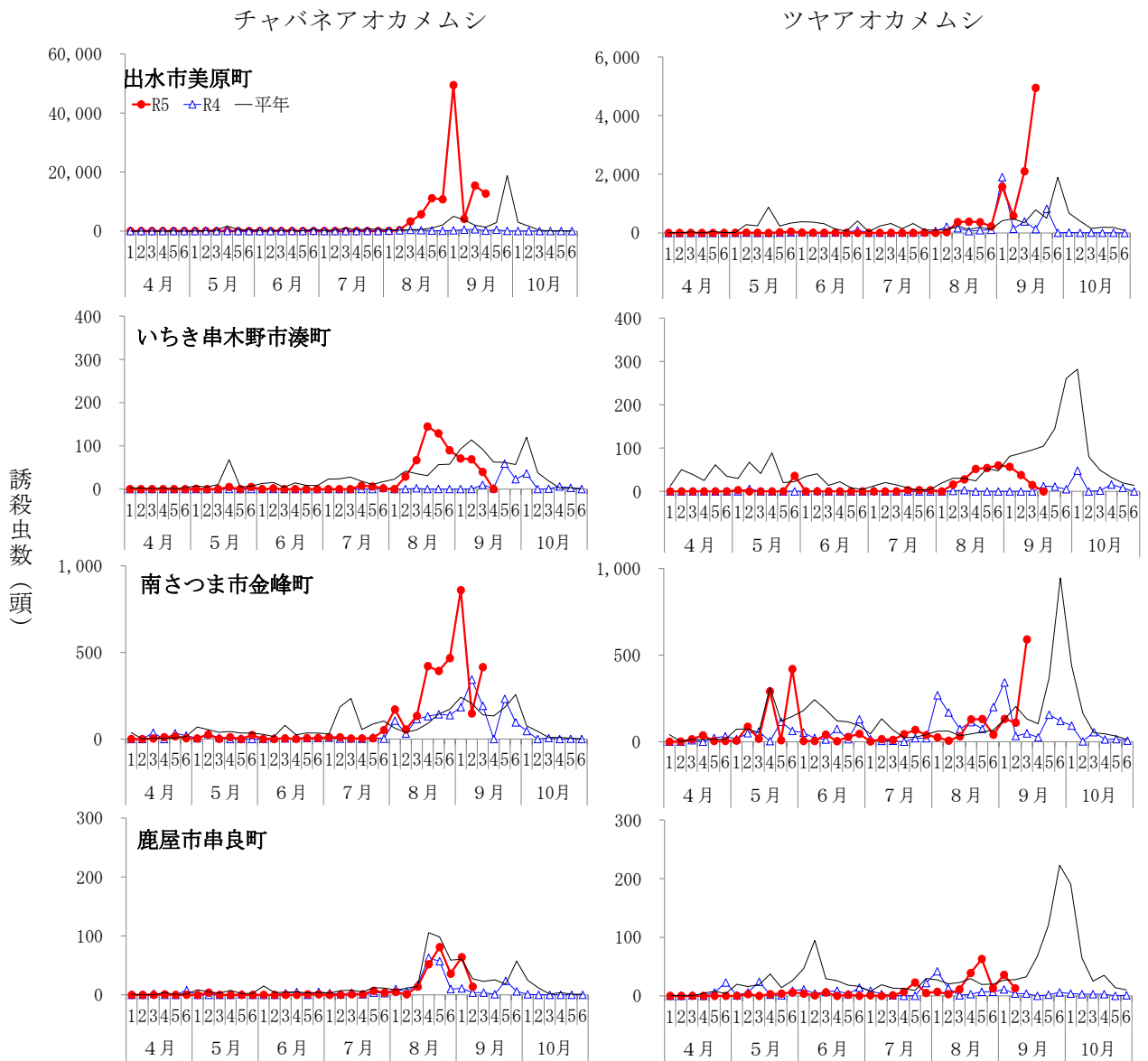


図 予察灯での果樹カメムシ類の誘殺虫数の推移

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 果樹園への飛来は地域により異なり、園内でも偏りがあるので注意深く見回り、飛来を認めたら直ちに防除する。

(6) 果実吸蛾類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 並

奄美地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 14% (平年 14%)：並

<奄美地域>

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 0% (平年 0%)：並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 夜間に活動し、果実を吸汁し腐敗落果させる。果皮の薄い早生温州や津之輝等は被害を受けやすい。

(イ) 網目 5～10mmの防蛾網で被覆するほか、黄色灯を用いる場合はほ場全体が 2Lux以上の明るさになるように設置する。

VI. 茶 樹

1. チャ

(1) カンザワハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率 40% (平年 27%)
：やや多 (+)

寄生葉率 2.0% (平年1.8%)

：並

(イ) 気象予報

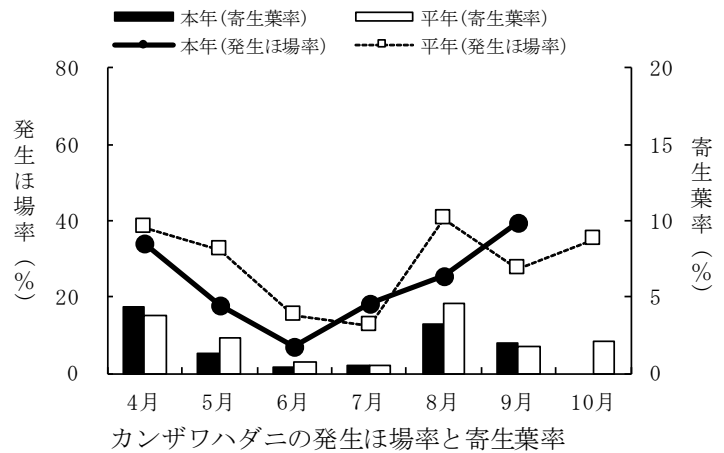
気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 越冬前の密度は翌春の発生量に大きく影響するので、秋整枝後に防除を行う。発生が多い園では秋整枝直後と11月中旬～下旬に防除を行う。

(イ) 薬剤は、葉裏まで十分にかかるように散布する。

(ウ) 天敵のカブリダニ類は9～10月に最も活躍するため、薬剤は影響が少ない剤を選定する。



防除に関する今月の留意事項

1. チャトゲコナジラミ

多発するとは場一面に成虫が乱舞し、作業性を低下させるほか、幼虫が寄生した枝ではすす病が発生し光合成能力を低下させる。

(1) 裾刈りは、寄生葉が除去され密度低下に有効である。

(2) 薬剤防除は若齢幼虫期の効果が高い。

(3) 本虫には天敵シルベストリコバチが有効なため、本天敵に影響の少ない薬剤を使用する。

農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋など）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. 散布時には薬剤がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。
6. クロルピクリン剤は、住宅地および畜舎に隣接するほ場や、土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。
7. 毒性が強い農薬は、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬、不要になった農薬および使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等を総合的に基づいた総合評価。
- 調査場所を記載しない発生ほ場率・発生数は、巡回調査の結果。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（＋）、（－）は、発生量の増加、減少要因を示す。
- 気象予報は、向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平年を用いている。